

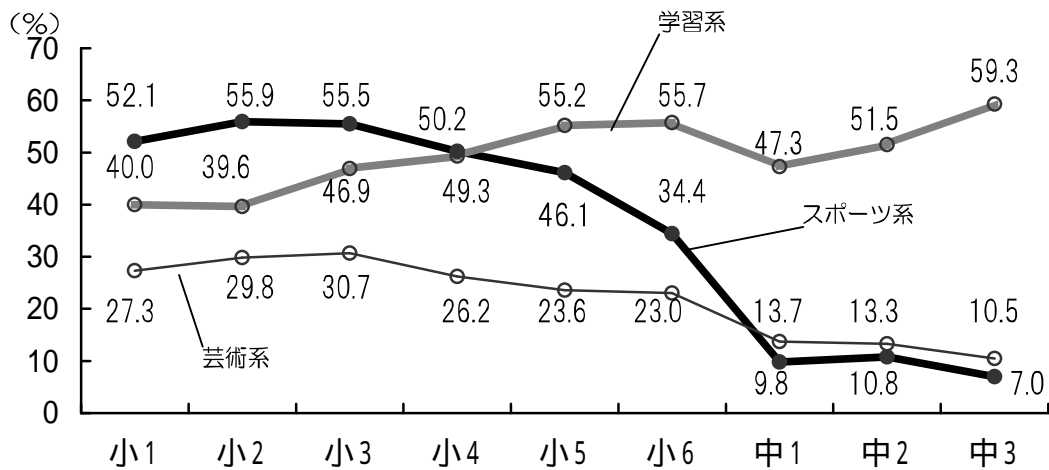
木曜定例ミーティング

議題：「現代の子供たちの生活環境とそこからくる問題点」

子供たちが、近所の空き地で野球やったり、鬼ごっこをやったりという風景をまったく見なくなりました。子どもたちは、放課後、何をして過ごしているのでしょうか。

下の資料をご覧ください。

【現在している習い事】 Benesse 教育開発センター「第3回子育て生活基本調査」2007年



この表は、「習い事」をしている子供たちの割合を示したものです。実に多くの子どもたちが、スポーツクラブや塾などで習い事をしているのがわかります。小学生のうち、スポーツが約50%、塾が約50%います。中学に上がると、部活動が本格的に始まることと、受験へ備える傾向が強まり、スポーツクラブへ通う子が減り、逆に塾へ通う子が増え始めます。

ここで一つの疑問点が出てきました。

「習い事によるスポーツ」と「空き地で自由に行うスポーツ」との違いとは、一体何でしょうか。

スタッフ A

「私の小学生の記憶では、学校の授業が大嫌いでした。理由は“拘束されている感”があったからです。もちろん学校の先生方は、私たち生徒が自発的に学習できるようにいろいろな工夫をされていましたが、学校の授業中と放課後とは、開放感がまったく違いました。」

スタッフ B

「放課後になれば、私たちは拘束を解かれ、友だちと集まり「今日は何をする？」と自由気

ままに決めていましたね。私が小学5年生の頃は、小2の弟を連れて、近所の友だち10人以上と一緒に鬼ごっこやかくれんぼをして遊びました。友だちの中には、私と同じように小さな弟を連れてきている人がいて、小さい子はおとうふ（ハンディあり）の状態で見ながら遊びましたね！」

スタッフC

「ケンカもよくありました。お互い自己主張し合っても、普段はなんとか折り合いをつけるのですが、たまに納得できずにケンカになっちゃいました。でも、そんな時は、まわりの他の仲間に迷惑がかからないように、少し離れたところへ行って取っ組み合いをしたものです。」

スタッフD

「そうそう！ドラマなんかで店の中でケンカになった大人同士が「表へ出る！」って言うあれですよ。ありましたね！」

スタッフA

「弟の面倒を見ながらだったり、自己主張が通らなかつたりと、常にすべてが自分の思い通りにならない場面があっても、学校の授業中のは大違いでした！放課後は自由に開放感があって、本当に楽しかったですね！」

これらの会話から見えてきたものがあります。

それは、「学校の授業とは、知識・情報を受け取るだけの受動的な作業」であり、「放課後の遊びとは、ソーシャルスキル(ソーシャルスキルとは、社会的な側面を含めたコミュニケーションスキルを表し、言語活動、行動、感情の統制なども含まれる社会的技能のことを言います)を学ぶための自発的な活動」であると言えます。

この見解は、先ほどの質問「習い事によるスポーツ」と「空き地で自由に行うスポーツ」との違いにも当てはまると思いませんか？

様々な「習い事」の中には、子供の好奇心を刺激して、自発的な活動ができるような工夫をしているスポーツクラブもあると思います。(うちのクラブもその一つです。)しかし、費用対効果の効率性を重んじる親の価値観も存在しています。スポーツクラブが基本的に営利活動である以上、このような親の価値観にも満足していただくために「教え込むことで一定期間内に上達させる(成長させる)」ことに、教育指針がシフトしてしまう現実もあります。

学校で5時間も6時間も授業を受けたあと、小学生の50%に当たる子供たちは、次はスポーツクラブや塾でまた受動的活動を続けています。自発的なエネルギーを自由に爆発させることなく、長い時間「習う人」となっています。

これにより、子供たちの技能・知識が豊かになることは間違いありません。スポーツクラブへ通っている子なら、勝敗やタイム等の“結果”となって出てくるでしょう。塾へ通っている子なら、学校のテストなどの“結果”がよくなるでしょう。しかし、その“過程”で、「自分から進んで何かを発見

しようとする意欲」「問題解決のために工夫する力(想像・発想する力)」「やったことがない初めての体験の中で、難しい局面を打開しようとする意欲」が、日に日に低下していくことが懸念されます。自分の周りの“未知のこと”は、すべて人から「教えてもらうべきこと」とであると認識してしまう子供たちを増やしてしまっているのではないのでしょうか。

スタッフ B

「最近、ジュニアスクール生から「それ、まだ習ってないよ」といった抗議に近い言葉を耳にします。」

スタッフ C

「未体験のものに対して、「どうすればうまくいくのか」という方に意識が向き、まずやってみようとする子供たちと、教えてもらったか否かに意識がいき、まだ教えてもらっていないという判断になると「教えてください」という意識になる子供とに分かれますよね。」

スタッフ A

「これは、子供たちが“習うこと”に慣れすぎているためにおこる言動ではないのでしょうか。」

現代の日本の子供たちの「ソーシャルスキル」の低下が問題視されています。その原因のひとつに「仲良しの強要」があります。親が子供に必要以上に仲良しを強調しすぎると、子供は他人とのケンカを避けるようになります。人が二人いれば、意見相違の場面が必ず出てきます。そのような場合、本来なら自己主張をしつつ、相手の意見もしっかりと聞くという姿勢が必要ですが、「仲良しの強要」を受けて育った子供はぶつかり合いを避けるあまり、自己主張を放棄し、相手の意見も聞かないといった行動をとってしまうようになります。このように他人との対立を避けるあまり、相手との距離感がつかめないまま育ってしまいます。この状態で社会へ飛び出した場合、どのようなことが起こるのか想像が付きません。

では、私たちニューウインブルドンテニスクラブは、子供たちに対して何ができるのでしょうか。

私たちは、スポーツ活動を通じて子供たちに「自主性」や「自立心」を養ってもらえるシステムと場所を提供します。私たちのクラブへ通ってくる子供たち一人ひとりが、自らの頭で考え、新しいことにチャレンジしたり、いろんな人とコミュニケーションをとったりと、技能を向上させることのみならず、人として成長していくことを最も重要に考えて、これからもあらゆる機会をプロデュースしていきます。

平成 25 年 7 月 18 日(木)